タミクレスト

ティナリウェンが蒔いた種を、新世代のミュージシャンが育てないと消えてしまう

サハラ砂漠で生きる民の希望を世界に発信する若きグループのリーダーに聞く

アリサ・デコート・豊崎

タミクレスト。元ティナリウェンの女性ヴォーカリスト、ウォヌ・ワレット・シダティはグループの中心でシャトマ＝姉妹を表わす存在である（写真＝Thomas Dorn）

遊牧生活を味わうには遅すぎた世代

夜も昼もカウボーイ・ブーツを履くウスマン・アグ・モサは、伝統的なターバンも、ムスリムのゆったりした服も皮の靴も嫌い。タミクレストのリーダーは、砂漠の男だが、らくだの毛の匂いより、ランドクルーザーのガソリンが馴染みだ。

マリ北部のキダル市のほこりにまみれた道から、アルジェリア南部のタマンラセット市のコンクリート・ジャングルを行き来するウスマン。アカシアの木が孤独に立つ砂の台地と幻想的な岩の景色が800キロも続く途中にティンザワテン（略称ティンザ）市がある。ウスマンは28年前この国境の町の南に生まれた。ティンザは乾いた川の線によって、二つに切断されているのが特徴である――北岸はアルジェリア、南岸はマリだ。フランス植民地化が残した国境の不条理を見事に表わすティンザに住む6000人のコミュニティも、この二つの国籍によって分断された。

20世紀の始めまでトゥアレグ族が支配した拡大なサハラのテリトリーは、フランス・アフリカ領の60年代の独立後、アルジェリア、ニジェール、マリ、リビアとブルキナファソに分割された。トゥアレグは分離・独立を求めて、62年に武装蜂起したが、激しい弾圧に合い、独自の言葉であるタマシェック語だけが彼らのアイデンティティの柱として残った。古代ベルベルの先祖からトゥアレグに受け継がれたタマシェック語で、ウスマンは歌っている。

ウスマンが生まれた時はテントの下ののんきな遊牧生活を味わうには遅すぎた。1974年と85年にサハラを襲った干ばつは家畜を絶滅させた。トゥアレグにとっては家畜、とりわけらくだはその社会、経済、そして愛情のアイデンティティである。家畜がいなくなれば、砂漠で生きる意味がなくなる。遊牧民は町に避難して、そこで新しい生き甲斐をさぐった。だが、町では貧困と、トゥアレグ族を差別する行政以外、将来の見込みがまったくない。失業した何千人の若者が、当時カダフィ大佐が多量に募集していた軍事キャンプ等の仕事でリビアに出稼ぎに行った。彼らは「イシュマール」、フランス語のショムール＝失業者の呼称で呼ばれた。

マリ政府に対するトゥアレグの武装蜂起が90年に再開された際、イシュマールたちが帰国し、戦い始める。彼らが主張しているのはトンブクトゥ、ガオ、キダルというマリ北部の3カ所を含む地域〝アザワド〟の自治である。女性が演奏するトゥアレグの伝統的な音楽を、男性の手によって革命のメッセージを発信する道具に変えたティナリウェンのメンバーも、この反乱に参加した。80年代からティナリウェンのリーダー、イブラヒム・アグ・アルハビブがエレキ・ギターを初めて使って生まれた音楽は、現地で「ギター」と呼ばれる、革命を鼓舞する音だ。タミクレストはそれを伝承した。

タミクレストの最新アルバム『シャトマ』＝姉妹はミュージシャンもアルジェリアに亡命した現状の中で作られた。深い苦痛を表現する曲は、ウスマンの穏やかな声とうっとりしたギターの音で、遠いサハラ砂漠の砂にまで聞くものの心を飛翔させてくれた。

『シャトマ』
オルターポップ ARPCD5134

戦争を越えて、トゥアレグの先祖は静かに暮らせるアザワドの地を残した。63年からマリ軍は反乱が起きるたびに復讐としてトゥアレグの市民を虐殺し続け、トゥアレグ族はアザワドを解放する意志を固めた。その目標は2012年4月、アザワド共和国の独立宣言に至ったが、国際社会が認めないため臨時政府のまま残り、その状態は混乱したままだ。土地がなければ、自由を取り戻すことができない。闇の中で、唯一光りを放つ目標、アザワドの希望をタミクレストが世界に伝え続ける。

視点を与えることが僕の役目だ

――マリでトゥアレグの武装蜂起が再開された90年はどこにいましたか。

「故郷のティンザからアルジェリアへ向かってマリ軍から逃げた。僕は5歳だった。女性たちが子どもを沢山連れて、岩の中に隠れた。僕の2カ月の妹は亡命の際に死んだと後で分かった。武装蜂起の代金を市民の命で払わないようにするため、〝トゥアレグ族〟とは違う名の下で闘争すべきだと思わせるほど不条理を感じる」

――92年にマリ政府と協定が結ばれ、一時的な平和が来ました。ティンザで通った学校は初アルバム〝Adagh〟（アダール）にも紹介されていますが、この学校の思い出は何ですか。

「ティンザの私立学校の先生が、フランス語だけでなくトゥアレグの文字も教えてくれて、子どもたちに勇気を沢山与えた。年末のイベントで作文を書かせたりして、そこで僕は初めて作曲をした。ギターは前から友達と一緒に弾いていた。曲はティナリウェンをカセットテープで聞いてコピーしていた。でも僕はミュージシャンになろうと思わなかった」

――子どもの時、どんな夢がありましたか。

「僕は勉強を続けて、自分のコミュニティのために何かをやりたかった。トゥアレグ族はジャーナリストや外交官もいない。国際的な場面において、この民の権利を弁護する者はいない。だから僕はそういう仕事をしたいと思った」

――その仕事を実現できなかった理由は何ですか。

「02年にキダル市の高校に行った。でも学校の環境がまったく違って、日常的に差別があった。あの時は、トゥアレグ族がすでに〝テロリスト〟としか見なされなかった。それで僕はこの先、勉強するのは無理だろうと思ったんだ」

――06年にトゥアレグの武装蜂起が改めて発生しましたが、ウスマンは参加したのですか。

ウスマン・アグ・モサ（写真＝Milan Cimfe）

「いや、でも僕は思想を共有し、親戚や友達も参加した。1992年の協定がまったく守られなくて、外国からの支援金も北へは届かない。僕のティンザの学校は07年にマリ軍に破壊された。そのような行為をするマリ政府こそが〝テロリスト〟だろう。当時、僕はタマンラセット市の様々なところでライヴをやって、初めて思った――もしもティナリウェンが蒔いた種を新世代のミュージシャンが育てないと、消えてしまう、と。それでタミクレストを結成したんだ」

――タミクレストでどんなメッセージを発信しようと思いましたか。

「僕は直接にトゥアレグの反乱を歌うことに興味がないが、視点を与えることは僕の役目だと思う。たとえば、反乱を考える前に、人間関係を縛る昔のトゥアレグ階級制や部族同士のジェラシーを廃止するのが未来だ。タミクレストの意味は〝結び目〟なんだ」

――タミクレストの活動はどうやって始まったのですか。

「僕はまずマリで活動したいと思った。首都バマコの人たちは、同じマリなのに砂漠に行ったことがない、トゥアレグの現実も音楽も知らない。だからマリ国立テレビにタミクレストのデモを送った。それは普通の歌だったよ、革命の歌ではない（笑）。でも結局だめだった。その後、08年に、トンブクトゥ周辺の〝Festival In The Desert〟に参加した時、ダートミュージックというロック・バンドと出会ったんだ。一緒にお茶を飲んだり、セッションしたり、ミュージシャン／プロデューサーのクリス・エックマンの提案でバマコで彼らのアルバムにも参加した。その後、初アルバムが録音された。〝Adagh〟だ」

――ダートミュージックと一緒に演奏した感想は？

「僕はピンク・フロイドなどの西欧ロックの曲もずっと聞いて練習していたから、ダートミュージックと一緒に演奏した時も、とても自然な感じだった。〝Adagh〟の

〝Toumastin〟もヒューゴ・レイス（元バッド・シーズ）のスライド・ギターを加えた曲だ。『シャトマ』で演奏したフランス人ギタリスト、ポール・サルバニアックがタミクレストの新メンバーになったので、また新しい音が生まれるだろう」

僕はいつでも砂漠の子でいたい

――〝Adagh〟が高い評価を受け、10年に初のヨーロッパ・ツアーに出ましたね。そして11年には〝Toumastin〟が同じグリッターハウス・レコードからリリースされます。当時のマリ北部の現状はどうなっていたのですか。

「サハラには外国人が入れなくなって、イスラム過激派テロによる人質事件が相次いだ。AQIM（イスラム・マグレブ諸国のアルカイダ）はアルジェリアからマリへ03年頃から来るようになった。最初は、何者なのか誰も分らない。遊牧民キャンプへ行って、コーランを見せながら、今まで聞いたことない解釈をし、モスクに研修を提案する。トゥアレグはムスリムだが、コーランの話をされると、アラビア語を読めないため、反論できない。こうやってイスラミストが入植した。第2段階は、麻薬や武器の密売だった。そこからアッラーは二次的になる。良心を保つため、たまに思い出すだけだ。マリ政府は10年間テロリストを攻撃しないで、そんなことをやらせた。でもトゥアレグ族は皆テロリストではない。そよ風にも流されてしまう葉っぱのように弱い存在である。しかし、ある事情が人を変える。それはたとえば貧困であり、子どもがいるような状況である。僕は、食べ物がないと子どもが毎日泣けば、自分の宗教を売って、その子を養うために何でもやると思う。他の選択がなければそうする」

――『シャトマ』のライナーに、日本の武士道によく似ている〝アシェック〟について書いてありますが、それを説明していただけますか。

「トゥアレグでは、〝アシェック〟という名誉の掟がある。人間性を尊敬する――戦争の時、敵を殺しても、決して子ども、女性や老人を殺さない。トゥアレグの男はターバンで顔を隠し、女性や年寄りの前に尊敬の意を表し、感情を表に出さない。これも〝アシェック〟だ。ターバンを着ない僕みたいな男も、〝アシェック〟を守る！　そして〝アシェック〟の伝統を男に伝え続けるのは、顔を隠さないトゥアレグ女性である」

――『シャトマ』はトゥアレグ女性に捧げる特別なアルバムですね。

「僕はフェミニストだ。子どもの時から女性たちと一緒にいるのが好きで、彼女たちが井戸に行く時、いつも同行した。トゥアレグの女性は自由だ。男のグループの中に女性がいても、彼女を仲間として受け入れる。決して、めんどくさいナンパなどしない。彼女たちは姉妹だ。男たちが反乱を起こし、姉妹たちがその結果を負担する。けれどけっして文句を言わない彼女たちは常に男たちを支えてくれる。トゥアレグの諺では、〝女性が男のズボンのベルト〟。女性を尊敬しない男は恥だ」

――アザワドの独立を支持しますか。

「はい。トゥアレグが自分の運命を決めなければならない。アザワドの人民はマリ政府の協定をもう信用しないという点では一致している。アザワドにフランス、アルジェリアなどにとってどんな隠れた争点があるのか分らないが、砂漠やその資源を企業に売ることは絶対受け入れられない」

――暇な時はどう過ごしているのですか。

「4駆で砂漠へ行って、沈黙の中で何週間も野宿し、焚き火をたいて、お茶を飲んで、ギターを弾いて、星空を眺める。僕はいつでもこういう風に砂漠の子でいたい」

〔インタヴューは9月、フランスで〕M